

日本は平和の「トップガン」目指せ！

みかみ まさよし
三上 昌佳

●NTT労働組合中央本部 企画組織部長

映画「トップガン」が35年ぶりに帰ってくる。1986年の高校2年生当時、なけなしの小遣いはたいて、たしか2回、いや3回、バドミントン部の友達と一緒に映画館に通った。「トムクルーズカット」は北海道片田舎の学校内でも大流行り。当時、所属していたバドミントン部は1年生に丸坊主を強要していたため、2年生になった私は長髪への憧れもあったが、自ら進んで短髪の「トムクルーズカット」へ。しかし「トムクルーズ」とはならず、「スポーツ刈り」や「角刈り」の高校生が校内に街にあふれた。私もそのうちの一人である。就職してからも「サントラ盤」はドライブの定番で、今でも聴くと胸が高鳴る。

トップガンはアメリカ海軍を舞台にした物語であるが、映画に登場する「F-14」は艦隊防空戦闘機と位置付けられ、「ソビエト連邦軍」に対抗するため開発されたとされている。「F-14」について調べを進めてみると、1983年に嘉手納飛行場内においてタイヤ1本がパンクし着陸に失敗するという事故が起きていることも分かった。

さて、話を今に戻すと、ロシアがウクライナに侵攻し、プーチンは核兵器の使用をチラつかせるなど、予断を許さない状況が続いている。これらを背景に、自民党や維新の一部議員からは、「核シェアリング」や「敵基地攻撃能力保有」更には憲法改正を主張する声が高まっている。憂慮に堪えない。今、日本がとるべき態度

は、唯一の被爆国として「非核三原則」を堅持し、それを内外に発信することではなかろうか。支援も、ウクライナや周辺諸国における難民、避難民への人道的なものに徹し、日本は平和分野の「トップガン」を目指すべきである。

また、沖縄は本年5月15日に本土復帰50年を迎えたが、今もなお、国土の1%に満たない沖縄に在日米軍施設の70%以上が集中し、本土復帰当時から何も変わっていないのが現状だ。そればかりか、政府は、県民の民意を無視し辺野古新基地建設を強引に推し進めている。これも、「日米地位協定」を見直そうとしてこなかった政治の責任である。また、自衛隊の配備増強、言い換えれば「沖縄の基地要塞化」が進んでいる。岸田首相は、記念式典で米軍基地負担軽減に取り組むと表明し、沖縄に寄り添う姿勢を強調したが、一体どのような具体策があるのか、沖縄の負担軽減に向け、言行一致を求めたい。

さて、「トップガン」であるが、同居する娘に「一緒に見に行かない？」と誘ったが「戦闘ものでしょ」と反応はいまいち。私からすると「トップガン」は戦闘映画ではない。友情とは、愛とは、平和とは、そして今回の作品には親子愛も含まれているかも。ウクライナに平穏な日常が戻ること、基地のない平和な沖縄に思いをはせつつ、そして、若かった高校生当時の私的感情も思い出しながら、娘と一緒に映画を楽しみたい。それにしても、トムクルーズは若い。（若く見える）その秘訣も聞きたいところだ。